

箏曲点字楽譜の形成過程に関する研究
—盲教育の黎明期から宮城道雄（1894-1956）による実践まで—

村山 佳寿子

本論文は、洋楽のシステムに基づく点字楽譜が、日本の伝統音楽の一種目である箏曲と結びつき、近代における音楽教育や盲教育の発展と共に、箏曲のための固有の記譜法として形成されてゆく過程を明らかにすることを目的としている。

盲人が扱う楽譜という特殊性故に、これまで研究対象とされることが殆どなかった箏曲の点字楽譜は、洋楽とのシステムの違いから“五線譜化”に時間を要した。このことについて、盲教育の分野では、「大正、昭和と研究が積み重ねられ、幾多の変遷を経て今日に至っている」という事実のみが、その内容を明らかにせぬまま紹介されている。本論文では、解決の足掛かりとなる、大河原欽吾『点字発達史』（1937）に不足している内容の補完、すなわち、概説的にしか述べられていない事実や未だ提示されていない記譜法の内容を、文献内で紹介されている点字や墨字の史料に当たって紐解くと同時に、『宮城道雄音楽作品目録』（1999）によってその存在が楽譜資料として公表されている、宮城道雄の自筆点字楽譜の内容を調査した。さらに、明治期以降の盲人と箏曲を取り巻く歴史的背景を、音楽教育を含む日本音楽や、盲教育に関する周辺の史資料を用いて検証することで、それらの研究史の中に箏曲の点字楽譜を位置づけることを目指した。

第1章では、点字楽譜が盲学校に導入される以前に存在した、盲人のための触察用楽譜「撫譜」に焦点を当てた。音楽取調掛並びに東京音楽学校での取り組みやそこに携わった人物に着目し、箏曲とは異なる洋楽のシステムを如何にして受容しようとしたのか、その試みの様相を、撫譜の実態解明を通して明らかにした。

第2章では、学校教育に従来の家元制度が組み込まれ、その後の点字楽譜を用いた箏曲の教習が行われるまでの、東京盲啞学校で行われた音楽教育の特徴とその動向について検討した。この時期は、箏曲の点字記譜法は考案されておらず、箏曲の点字楽譜も作成されなかったが、それらは大正期に入って一朝一夕に完成したのではなく、同校の音楽教育が構築される過程において一時的に洋楽の職業教育が試みられたことにより、点字が導入された初期の段階には既にその萌芽が見られたことが確認できた。その要因には、文部省移管を契機として、同じ官立で音楽の専門教育を行った東京音楽学校との繋がりが出来たことがあることは明白だった。

第3章では、東京盲学校における箏曲の点字記譜法の変遷を明らかにした。大正期に考案された記譜法は、複雑化した手法や洋楽で用いる手法の採用によって記号の数は次第に増加したが、実際の手法とは意味が結び付かない、記憶し辛いものであった。昭和初期になると、「古曲に於ける特殊手法以外は全て」洋楽の記号を用いることになり、複数の洋楽の記号を組み合わせることで、利用者が記憶すべき記号の数が大幅に減少した。これと同様の特徴が、学内で作成された箏曲点字楽譜「宮城道雄作曲集」からも見てとれたが、用いられていたのは、宮城の自筆点字楽譜と同様、大阪市立盲学校で考案された記譜法であった。ここから、大正期より考案・改正が為された山田流箏曲のための記譜法と、大阪市立盲学校で考案された生田流箏曲のための記譜法とが、昭和初期の東京盲学校で併存していた実態が浮かび上がってきた。

第4章では、大阪市立盲学校の記譜法を紹介した箏曲点字楽譜解説書『点字箏譜解説』（1925）の記載内容と、その成立背景を検討した。同時代の東京盲学校の記譜法との比較・考察によって、その記譜法は、手法記号以外は全て洋楽の点字記譜法に基づいており、さらにその手法記号においても、洋楽で用いられる記号によって音色や演奏時の動作を連想させることが明らかになった。つまり、洋楽の記号の意味を把握していれば、記憶の補助になる、利用者にとって非常に合理的な記譜法であった。その成立には、大阪で初めて行われた宮城の演奏が関係しており、同校音楽科の内容改善を目的として、「新日本音楽」を研究するために、卒業生から教員心得になった川端米逸が東京へ長期出張した成果物が、『点字箏譜解説』であったことが確認できた。この時、川端は、宮城より直接「新箏曲」の教習を受けていたことから、著者の川端と、その記譜法を用いて自身の作品を記した宮城には、直接の接点があったことも明らかになった。

第5章では、宮城道雄の自筆点字楽譜を扱った。はじめに、これまでの墨字による自筆譜研究とは異なる分析の着眼点を見出すために、そのアプローチを援用しながら、全体的な記譜の特徴の解明を試みた。楽譜の構成や記譜に用いた筆記具等に注目して検証を行ったところ、その多くが宮城の作曲期間晩年のものであり、また、時期によって記譜に相違や変化を有していることが認められた。次に、「秋の調」という、教則的意図を以て作成され、現存する宮城の自筆点字楽譜の中でも記譜の年代が最も古い特徴を持つ史料を、公刊された2種の墨字楽譜との比較を通して検討すると、作曲者である宮城の意図が窺える直接的な情報を有していることや、宮城の弟子（盲人・墨字利用者）がそれぞれ楽譜を通して知り得る内容の差異が認められた。これらの結果からは、自筆点字楽譜そのものの役割にも変化が生じていった様子が窺えた。

このように箏曲点字楽譜の形成過程を辿ると、その誕生や変化が起こった背景には、外的要因として、①東京盲学校と音楽取調掛ないし東京音楽学校との関係性、②大阪市立盲学校が考案した新たな記譜法の出現、③宮城道雄からの影響があることが明らかになった。